地方銀行も一役買ってんで!大阪・関西万博!

業務部　副調査役　六村　明日香

■　「大阪・関西万博」の開催が2025年４月に迫り、地元・大阪は盛り上がりを見せています。地元の地方銀行もお取引先の万博出展を支援するなど、その盛り上げに一役買っています。

■　本稿では、万博をきっかけとし、今後の大きな発展を展望する地元企業と、地元企業への伴走支援を通じ、地域経済の成長を支える地方銀行の取り組みをご紹介します。

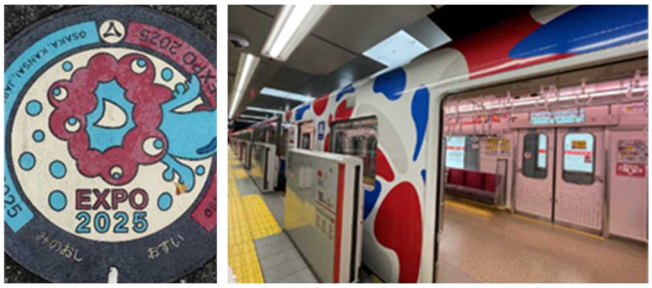
はじめに

2024年秋、取材チームが降り立った大阪では、街のいたるところに「大阪・関西万博」の公式キャラクター「ミャクミャク」の姿がありました。万博開幕まであと４か月を切り、大阪の盛り上がりはどんどん熱を帯びています。

今回の万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」。万博会場は「未来社会の実験場（People's Living Lab）」と位置づけられており、国内・海外の様々なパビリオンでは、健康・医療、カーボンニュートラル、デジタル化などに関する新たな技術、システムが体験できる予定です。

関西で万博が開催されるのは、1970年の大阪万博以来、実に55年ぶり。地元では、161の国と地域が参加するこの一大イベントを経済界あげて応援しており、大阪の地方銀行もその盛り上げに一役買っています。

今回は、そんな大阪府に本店を置く地方銀行である**池田泉州銀行**と**関西みらい銀行**を取材しました。



▲ 箕面市にあるミャクミャクが描かれたマンホール（左）と、大阪メトロのラッピング車両（右）。

1000年後の未来へ今を伝える～池田泉州銀行×クモノスコーポレーション株式会社～

～池田泉州銀行の「GUTSU GUTSUチャレンジ」～

大阪･関西万博では、国内外から多数のパビリオンが設置されます。このうち「大阪ヘルスケアパビリオン」は、大阪府･大阪市が地元の大学や企業等と出展するパビリオンです。

大阪ヘルスケアパビリオン

- 大阪ヘルスケアパビリオンのテーマは、「人は生まれ変われる」「新たな一歩を踏み出す」という意味を込めた「REBORN」。
- 地元銀行を含む14団体[1]が展示企画者となり、それぞれが「リボーンチャレンジ」として大阪の優れた中小企業や、スタートアップを発掘する事業を展開し、出展企業を募集しました。
- その結果、441社が出展企業に選ばれ、万博開幕に向け、近未来の暮らしを感じられる体験を提供するため、展示内容や表現方法を練っているところです。

池田泉州銀行は、展示企画者として、今回の万博を魅力ある技術やビジネスを展開する地域の企業にとっての「未来に向けた起爆剤」にしたいと言います。

そんな池田泉州銀行のリボーンチャレンジは名付けて「GUTSU GUTSUチャレンジ」。大阪ヘルスケアパビリオンへの出展を通じて生まれた様々な可能性やアイデアを混ぜ合わせ、ぐつぐつ煮込んで新しい製品やビジネスを産み出したいという想いが込められています。

同行は、「01:大阪発！ワクワクする未来の暮らし」「02:共に創ろう、ヒトとモノとデジタルの未来」「03: みんなで描こう、誰もが暮らしやすい社会」の３つのテーマを設定し、出展企業を募集しました。

そこに、わが社こそはと集った企業は100社以上。技術、デザイン、SDGsなどの専門家が審査員を務め、情緒的価値、社会的価値、独創性・革新性、実現可能性を審査基準に、2024年３月、出展企業32社を選出したのです。

同行は、BtoBビジネスが中心の出展企業が多い中、自社の技術や製品をどのように魅せれば一般の来場者に“刺さる”のか、専門家のアドバイスを得ながら、出展企業とのミーティングを重ねています。

同行の支援は、出展企業のPR面にも及んでおり、出展各社が掲載されたパンフレットやウェブサイトの作成のほか、同行がスポンサーをしているラジオ番組にゲスト出演してもらい、万博への意気込みなどを話してもらうといった取り組みも行っています。さらに12月には、展示コンセプトである「大阪超越文化横丁」を会期前に体験いただくプレ展示イベントを開催。実際の展示物の一部を用意して各社の取り組みをアピールするほか、2025年４月には、万博

開幕に合わせて、梅田駅構内に出展企業を１社ずつ「超越人」として紹介する大きなポスターを掲示する予定です。

なお、同行は、今回の万博出展をきっかけに出展企業の事業成長や新たな共創・マッチングの機会につなげてもらおうと、万博終了後を見据え、展示技術に関する特許や知的財産権取得関係の支援や、出展企業同士の交流の場の設定も行っています。本年９月には、出展企業を集めて中間報告会を開催。万博後の協力のアイデアなどについても活発に議論し、各社のやる気のギアが一段上がったそうです。

▲ 池田泉州銀行が作成したウェブサイトのトップページ（https://www.sihd-bk.jp/corporation/expo2025/）。

▲ 中間報告会の様子。池田泉州銀行提供。

～３Dスキャナーで「森羅万象」をデジタル化～

大阪府箕面市の「クモノスコーポレーション㈱」（以下、クモノス社）は、そんな池田泉州銀行の「GUTSU GUTSUチャレンジ」によりパビリオンへの出展が決まった企業の１つです。

クモノス社は、3Dレーザースキャナーを用いた空間計測事業等を手掛ける企業です。同社の３Ｄレーザースキャナーは、１秒間に200万点の座標をポイントし、建造物や空間を正確にデータ化することができます。

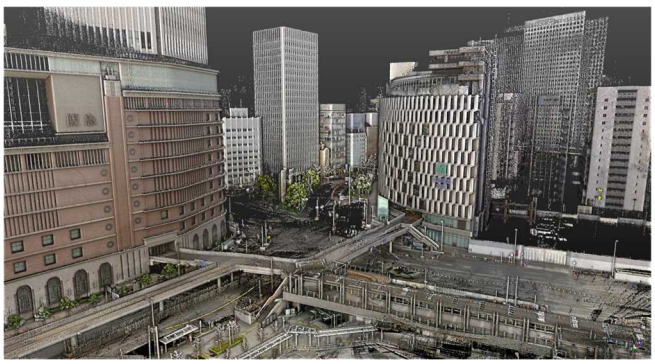
また、2006年に開発した道路などのひび割れを計測するシステム「KUMONOS」は、100メートル離れたところからでも、ごく小さなひび割れを正確に測量できます。遠くから実際のひび割れの長さや幅を計測するために蜘蛛の巣のようなスケールを用いていることからこの名がつき、現在の社名の由来にもなっています。

クモノス社の中庭 和秀 社長は、幼いころに1970年の大阪万博に連れて行ってもらえなかったことから万博に対する強い憧れがあるそうです。万博を通じて、同社の３Ｄ計測技術をたくさんの人たちに知ってほしいという理由からパビリオン出展へのチャレンジを決めたと言います。

中庭社長は「３Ｄ計測の利用シーンは、今は、建設・道路工事のための測量や、歴史的建造物のデータ保存などが中心だが、多くの来場者がこの技術に触れることで、自社が想定もしていない新しいニーズ・可能性を掘り起こすことを期待している。スキャナーの軽量化も進んでおり、例えば、個人が実家を取り壊すときに、外装・内装の全てを３Ｄデータとして残すことが一般的になるような日も来るかもしれない」と展望を語ってくれました。

同社がこれまでに３Ｄスキャナーでデータ化した建造物は、阪神甲子園球場、軍艦島、銀座にあった中銀カプセルタワービルなど3,000以上に及びます。大阪ヘルスケアパビリオンでは、海外からも多数の来場者があることを見据え、何をどのように展示すれば来場客にワクワク楽しく見てもらえるか、池田泉州銀行とミーティングを重ねながら、準備を進めています。

また、同社は、パビリオン出展だけでなく、万博の「会場整備参加」協賛契約の第１号として、会場の基盤工事に必要な測量や、パビリオン等の敷地境界の測量など、測量全般を手掛けています。



▲ ３Ｄスキャナー（左）、３Ｄレーザースキャナーでデータ化した阪急阪神百貨店（右）。いずれもクモノスコーポレーション提供。

～万博開幕に向けて、そして未来へ～

池田泉州銀行の万博担当者は、大阪ヘルスケアパビリオンの主役は出展する中小企業、スタートアップであり、同行が選出した32社はもちろんのこと、26週にわたる全441社の展示が盛り上がらなければならないし、万博終了後も、１つの目的のために集まった441社が何らかの協業やマッチングを行えるような仕組みを考えたいとしています。そのために、展示企画者を務める他の金融機関などとも十分に連携しながら、開幕に備えたいと強い意気込みを語りました。

琵琶湖のヨシを世界へ発信～関西みらい銀行×株式会社たまゆら×高麻株式会社

大阪・関西万博では、テーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」の実現に向けた企業や個人の活動を「共創チャレンジ」として認定しており、来場者がパビリオンなどを“見る”だけでなく、多くの人が“主体となって”万博に参加できる枠組みを設けています。

～琵琶湖のヨシがつなぐ、地元と世界～

右の写真は、大阪・関西万博の運営スタッフの公式ユニフォームの帽子で、生地に琵琶湖畔で刈り取られたヨシ（葦）が用いられています。この帽子は、ユニフォームや作業着の製造・販売を行う「㈱たまゆら」（大阪府枚方市。以下、たまゆら社）、生地メーカーの「高麻㈱」（滋賀県高島市。以下、高麻社）、そして両社のビジネスマッチングを支援した**関西みらい銀行**の３社による共創チャレンジ「ヨシ（葦）から始まるSDGs」から誕生したものです。

ヨシは、川辺、湖畔などにみられるイネ科の植物で、関西では琵琶湖畔の群生が知られています。ヨシは、水中のリンや大気中のCO_2を吸収するため、琵琶湖の水質保全や脱炭素に寄与していますが、近年は、生活においてヨシが活用される場面が少なくなり、群生の放置による水質悪化や、野焼きによって逆にCO_2の排出源になっていることが問題になっていました。

こうした課題をなんとかしようと、2020年７月、高麻社の中村 正博 社長が会長となって「びわこ高島の葦（ヨシ）を守る会」を組織し、年１回のヨシ刈りイベントや、ヨシを用いた繊維開発に着手。一方、たまゆら社は、ユニフォーム等の製作を通じて持続可能な社会に貢献する企業になりたい、SDGsへの取り組みを強化したいと考えていました。そこで、2021年、両社の取引銀行であった関西みらい銀行がビジネスマッチングの機会を提供し、ヨシ素材を用いたシャツや帽子の製作に取り掛かることになったのです。

たまゆら社は、2025年が同社の創立60周年でもあることから、地元で開催する万博を一緒に盛り上げたいと考え、３社のヨシ素材活用の取り組みを「共創チャレンジ」に登録。そして、2022年10月に実施された万博協会によるスタッフユニフォームの協賛募集に対してもヨシ素材を広く知ってもらうまたとないチャンスとしてエントリーしたと言います。

▲ たまゆら社が製作した帽子。

▲ 2024年12月に行われたヨシ刈りの様子。関西みらい銀行提供。

この帽子が評価されたポイントは、生地に琵琶湖畔のヨシを用いることによって、水質保全や脱炭素化につながることに加え、公式ユニフォームとして約2,000個製作される帽子が、万博終了後に100%リサイクルされる点です。回収された帽子はワタに加工された後、軍手やかばんなどの生地に再利用する、熱を加え固く圧着することで自動車の内装材や什器の棚板に利用するなど、廃棄物をゼロにする仕組みを構築しています。

たまゆら社は、帽子の製作だけでなく、大阪ヘルスケアパビリオンにおけるりそなグループのリボーンチャレンジ「Resona Mirai Color ～秋～ミライと和の調和」[2]において、再生素材を利用した生地を使い、革新的な機能を持たせた「未来を豊かにするユニフォーム」の展示を行う予定です。同社は、「パビリオンへの出展にとどまらず、著名なデザイナーとのコラボなどを通じて、フランスの展示会に生地を出品するなど、いずれは関西を飛び出して、ヨシなどの植物から製作したユニフォームを世界に広めたい」とビジョンを話してくれました。

～万博への出展支援から万博後の未来を描く～

関西みらい銀行は、大阪のたまゆら社と、滋賀県北部の高島市にある高麻社とのマッチングは、物理的な距離がありながらも、近畿全体の取引先ネットワークを活用して、的確にニーズを汲み上げることができた好事例だと言います。また、マッチング後は、たまゆら社が主催するユニフォームの展示会への集客支援や、上記の琵琶湖のヨシ刈りイベントへの参加、ヨシ刈りから企業ユニフォームの作製まで企業がヨシの資源循環に参加する仕組み“TAMAYURA SUSTAINABLE WORKS”が滋賀県が認定する地域ブランド「ビワコプロダクツ」[3]に認定されるよう働き掛けるなど、同社の取り組みを手助けしています。

同行は、今後の地方銀行の企業に対する伴走支援には、地域貢献やサステナブルな視点が不可欠であるとし、ヨシを用いたユニフォーム等が、たまゆら社の知名度や企業イメージの向上、ヨシの活用の産業化、雇用創出などにつながり、持続可能な地域社会の一翼を担っていくことを期待しています。

大ヨシを使った帽子のエコサイクル

1．ヨシの刈取り
ヨシを刈取り、よく乾燥させて、繊維を取り出します。

2．和紙糸
ヨシから取り出した繊維を撚って糸を紡ぎます。

3．生地
和紙糸を他の繊維の糸と合わせて布に織ります。

4．リサイクル
処理工場で回収した衣類を粉砕し、ワタに変えます。

5．新たな製品へ
リサイクルされたワタを軍手などに仕立て直すほか、熱を加えて圧着し板に変えて自動車の内装材や什器の棚板を作成。軍手は清掃活動に利用するなど、連続した持続的活動に寄与。

また、りそなグループのリボーンチャレンジにはたまゆら社を含めた39社が選定され、パビリオン出展を予定しています。同行も出展に向けた各社の準備を支援しており、９月には出展企業が集まって進捗状況などを発表するピッチイベントを開催。その結果、出展企業同士の横のつながりができるなど、銀行ならではの機会を提供できていると考えています。

同行は、りそなグループの一員として、海外を含めたネットワークを活かし、出展企業の最新の技術やシステムに対するニーズのマッチングや海外展開など、各社の成長に向けて伴走していきたいとしています。

おわりに

今回紹介した池田泉州銀行、関西みらい銀行は、お取引先企業の万博へのチャレンジを様々な形でサポートしています。

万博に関わる企業にとって、万博は１つのきっかけにすぎません。地方銀行は、地域の企業に密着する金融機関として、会場で皆さんの目に触れた技術などが未来の「当たり前」になるまで、万博終了後も各社の取り組みを応援していきます。

ぜひ万博にお越しいただき、「いのち輝く未来社会のデザイン」を体感してみてください。

[1] 大阪ヘルスケアパビリオンの展示企画者は、池田泉州銀行、りそな銀行、三菱UFJ銀行、大阪産業技術研究所、大阪産業局、大阪シティ信用金庫、大阪商工会議所、大阪商工信用金庫、大阪府経営合理化協会、大阪府中小企業団体中央会、MUIC Kansai、関西大学、西日本プラスチック製品工業協会、八尾市の14団体が務めている。

[2] りそなグループのリボーンチャレンジは、“Four Seasons”のテーマのもと、４週の展示期間を四季になぞらえ、「春：ミライの医療」「夏：ミライのメトロポリス」「秋：ミライと和の調和」「冬：ミライのテクノロジー」として39社の出展を行う。https://www.resona-gr.co.jp/resonamiraicolor/

[3] ビワコプロダクツは、2030年の持続可能社会に向けて、滋賀県が県内の企業等の水環境保全に係る優れた技術やコンセプトに裏打ちされた製品・サービスを「ビワコプロダクツ」（Lake Biwa Products）として選定する取り組み。https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/kankyou/335887.html

こちらのレポートはいかがでしたか？ぜひ、ご意見・ご感想をお聞かせください！ ▷▷▷ クリック or